図書館だより

No. 11

平成 30 年 3 月 20 日

3学期も今日でおしまいです。1学期、2学期に比べ、3学期はあっという間に感じますが、自分自身を振り返ってみると、どんなことが浮かぶでしょうか。セブ島へ語学研修に行ってきた人もいれば、明日からのイングリッシュキャンプに参加する人もいるように、英語を学ぶことに意欲的な人が増えてきているように感じます。連日、日本の選手の活躍に歓喜した平昌オリンピックが閉幕し、いよいよ2年後は東京オリンピックです。「ボランティアで参加したい！」と思っている人も多いようですし、頑張って、英語力をあげていきましょう！図書館にも英語をはじめ、語学の本を揃えていますので、たくさん活用してください。今はちょうど長期貸出の期間でもありますので、春休み中にさっそく励めるよう借りていくのをおすすめします。

先月、気象庁から今年の夏は猛暑日多めと発表があり、「雪の次は暑さの心配かぁ」と、気持ちが一瞬夏へと向いてしまいましたが、まずはすぐそこまで来ている春を楽しみましょう。関東の桜も例年より早く開花し始めましたし、春の花々を愛でて、心を明るくしたいものです。

*模範的なうえに実際的な英語を、楽しく身につける

837-デ 『ディズニーの英語』　石原真弓 ‖ 英文解説　KADOKAWA

830-イ 『夢をかなえ英語はディズニー映画が教えてくれた』 飯田百合子 ‖ 著　サンマーク出版　で、帰国子女でもなく留学経験もない著者の飯田さんが同時通訳という仕事に就けたのは、ディズニー映画で英語を勉強したからと言っています。ディズニーアニメのシンプルで模範的な英語。英語ネイティブならではのフレーズを楽しく学べ、日本語とは違うリズムも歌で感じられるからだそうです。ならばこの『ディズニーの英語』シリーズを片手に、好きなアニメでとことん生きた英語を学んでみませんか？『眠れる森の美女』『アナと雪の女王』『シンデレラ』『美女と野獣』etc.きっとあなたの好きな作品があります。辞書なしでも大丈夫だし、フレーズチェックも文法チェックもできて、リスニングもリーディングもきっと上達できます。

＊何気なく咲く花の美しさ

470-タ 『美しき小さな雑草の花図鑑』　大作 昇一 ‖ 写真　多田 多恵子 ‖ 文　山と渓谷社

この図鑑に載っているのは、普段、目もくれずに通り過ぎてしまっている雑草ばかりです。しかし、本を開くと、「雑草と言う名前の草はない」と昭和天皇もおっしゃられていた言葉のように、1本1本が名前を持った花であり、草なのだなと実感できます。ページいっぱいに載っている花々はどれも美しく、愛らしい姿をしていて、うっとりと眺めてしまう魅力にあふれています。また、実物大の小ささを目の当たりにして、「こんなに小さいの！？」と驚きの連続でもあります。健気に生きる草花の名前や花の咲く季節を覚え、その姿に四季の移ろいや成長を感じ、楽しめる人になりましょう。

春だから読みたいこの１冊

春休み、みなさんはどんな過ごし方をしようと計画中ですか。朝寝坊も1日ゴロゴロするのも魅力的ではありますが、せっかくですから、あちこち出かけたり、新年度の予習に精を出したり、身の回りの整理整頓をしたりと、有効な時間を送りましょう。読書の時間もそのひとつ。春にこそ読んでほしい、そんな3冊を紹介します。新着本もどんどん入ってきていますので、そちらもチェックしていってください・。

913.6-ツ 『東京會舘とわたし』　辻村 深月 ‖ 著　毎日新聞社

大正 11 年　東京の丸の内に東京會舘が創業した。華やかでありながら、「誰でも気軽に利用できる民衆のための社交場」を目指したこの場所で、従業員として、料理人として、花嫁として、お客として、人生の大切な瞬間を送った人たちの物語が紡がれています。大正、昭和、平成と3つの時代をまたぎ、姿を変えながらも様々な人の様々な瞬間を受け止めてきた東京會舘の歴史とともに語られる暖かく懐かしい思い出の数々が心にふわりと優しい風を起こしてくれます。

実は今、残念なことに東京會舘の本館は建て替えのため休館中です。読んでいる最中から湧き起こる「東京會舘へ行ってみたい！」という気持ちは 2019 年 1 月まであたためておいてください。

913.6-ム 『桜風堂ものがたり』　村山 早紀 ‖ 著　PHP研究所

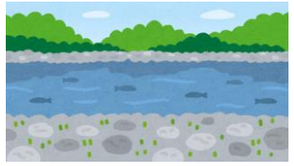
『胡蝶亭さん、この町に来るなら、春がいい。綺麗な桜が咲くんです』

たくさんの未練を残したまま、長年勤めた書店を辞め、心も体も疲れ果てていた月原一整（いっせい）の脳裏に浮かんだのは、「桜風堂」店主のこの一言だった。桜風堂は過疎の進んだ小さな町　桜野町にある唯一の書店。店主の言葉に導かれるように、SNS での繋がりしかない桜風堂を訪れた一整は、にこやかに迎えてくれた店主から大事な任務を託される。一整や店主、書店員たちから伝わってくるのは、本が好きだという想いです。そして、本と人を結ぶ書店を守りたいという想い、そして、そういう想いを抱く彼らのあたたかい絆が本から溢れていて、読む人の心にも優しいぬくもりが広がっていきます。

913.6-イ 『春や春』　森谷 明子 ‖ 著　光文社

須崎茜には、好きなものがある。それは、俳句だ。女子高生にしては、渋い趣味かもしれないけれど、たった十七字の言葉が茜を楽しませてくれるのだ。そして、かつて句会で出会った同い年の少年を思い出させるのだ。音信が途絶えてしまったその少年の名と、茜はある場所で再会する。それは「俳句甲子園」と書かれた本の中。茜と同じように少年もまだ俳句を続けている。この発見が茜の背中を押し、縁あって集った 5 人の仲間と俳句同好会を結成する。素人ばかりのメンバーが力を合わせ、目指すは俳句甲子園出場！！「教科書で習うもの」ではなく、「自ら触れて自由に楽しむもの」として、俳句に親しみ、そこから浮かび上がる情景のおもしろさを感じてみてください。

日本の誇れる文豪たち～おさえておきたい重鎮作家編～



日本の誇れる文豪たちの大トリを飾る作家は森鴎外です。鴎外の父は、島根県津和野藩主の主治医であり、長男として生まれた鴎外は、19 歳で既に東京医学部を卒業。22 歳でドイツへ留学します。後に発表される『舞姫』には、エリスという女性が登場しますが、帰国した鴎外を追って東京にやってきたドイツ人女性の名前もまたエリスでした。留学後は、軍医として働く傍(かたわ)らで、翻訳、小説、評論と文学活動を行なっていきます。翻訳においては、アンデルセンの『即興詩人』は原作以上と評されています。軍医と文学者との二重生活は,陸軍内部でトラブルを生み、小倉へ左遷されたこともありました。それでも鴎外は 46 歳で軍医総監となります。小説『山椒大夫』や『高瀬舟』、『阿部一族』などは晩年の作品で、この時期には史伝も多く書いています。

＊雅文体を体験

B913.6-モ 『舞姫・うたかたの記』　森 鴎外 ‖ 著　角川書店

書名の 2 編のほか、『ふた夜』、『文づかい』の計4編が収録されています。『ふた夜』は鴎外による翻訳短編小説、残りの 3 編は、ドイツ留学時代の鴎外の体験が盛り込まれたドイツ三部作と呼ばれています。雅文体と呼ばれる江戸時代や平安時代の仮名文を模して書かれた文体は、読み慣れるまで苦労しますが、そんな時は声に出して読んでみてください。音にすることで雅文体の持つ雰囲気を味わえます。また、わからないなりに解釈しながら読んでいくと、少しずつニュアンスが掴めてきます。『舞姫』は、命を受けベルリンへやって来た豊太郎と、踊り子エリスの物語です。2 人が出会い、幸せであった時間は長くは続かず、豊太郎はやがてエリスと様々なものを天秤にかけて迷い悩み、その決断が大きな波紋を呼びます。ああ、エリス…。そう思わずにはいられない結末です。

＊答えはなくとも考えずにはいられない

B913-モ 『山椒大夫・高瀬舟』　森 鴎外 ‖ 著　新潮社

書名の 2 編のほか、12 編の短編が収録されています。

『高瀬舟』の舞台となるのは、京都の高瀬川を渡る舟の上です。その高瀬舟に乗っているのは弟を殺した罪人として島流しにあう喜助とその護送をする役人 羽田庄兵衛。庄兵衛はいつもの罪人とは違って晴れやかな面持ちをしている喜助が気になり、どうしてそのように晴れやかなのかを問います。問いかけに対し、喜助が語った彼のこれまでの壮絶を極める身の上話は、庄兵衛だけでなく読者の心にもざわめきを起こします。事実だけで物を言えば、罪状のとおり、確かに喜助は弟を殺ています。しかし、その動機を知った時、果たしてそれを「弟殺し」と呼ぶのか、改めて考えずにはいられません。

＊鴎外の書いた初 現代長編小説

B913.6-モ 『青年』　森 鴎外 ‖ 著　岩波書店

「詩人になりたい、小説を書いてみたい」と夢を抱いて田舎から上京してきた純一。1日目からあちこちへ繰り出し、作家や文学好きの仲間に出会い、交流を深めていく。異性へ対し、揺れる自身の心について迷い悩んでいるところにも若者らしさが滲み出ています。その行方も気になるところ。

この『青年』は、夏目漱石の『三四郎』と並べられる作品でもあり、同じように地方から、東京へ出てきた青年 純一と三四郎の様子を読み比べてみるのもおもしろいです。さらに、物語の中には、森鴎外や夏目漱石などをモデルとした作家が登場します。彼らをどんなキャラクターで描いているのかに注目してみたり、純一の歩く東京（埼玉の大宮も登場します）の街並みを頭に思い浮かべて共に歩いてみたりも楽しんでほしいです。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

山崎豊子さんの『**沈まぬ太陽 3 御巣鷹山篇**』(**B913.6-ヤ 新潮社**)を読みました。『沈まぬ太陽』は、航空会社に勤める主人公が巨大な組織や権力に立ち向かい、ふり払われながらも信念を貫いていく様子が描かれた長編小説です。1巻2巻を飛ばして3巻から読み始めたのは、「一番読み応えのある3巻から読み始めてみるのもあり」とおすすめされたからですが、読み始めてすぐ、ほんの数ページで日航ジャンボ機墜落事故の起きた 1985 年 8 月へタイムスリップしてしまったかのような気持ちになりました。

『御巣鷹山篇』はあの事故を題材とした“小説”ではありますが、ここに描かれた光景というのは御巣鷹山に広がっていたのであろう光景なのでしょう。遺族の方、救出や検視に携わった方の負った悲しみや無念さは計り知れませんが、想像しきれないながらも浮かんでくる様々な光景に何度も胸が詰まりました。今までもこの事故について気になって読んだり調べたりしてきましたが、事故を起こした企業の一社員が主人公の小説を読んで、事故後の補償交渉などについて深く考えさせられました。　【今井】

あれから30年！そう言うとまるで綾小路きみまろさんのネタかと思われるかもしれませんが、ぜんぜん笑えない話です。売れっ子なのに、遅筆で有名な作家さんは何人かいらっしゃいます。なかでも田中芳樹さん！（本校の先生とは別人ですよ！念のため）　シリーズによっては何年も新刊が出ないこともあるので、その物語が面白くて続きを早く読みたい気持ちの分だけ読者はやきもきし、待ちわび、そして最終的にある種のさとりのような境地に導かれてしまいます。**『アルスラーン戦記』田中芳樹 ‖ 著 (B913.6-タ 角川書店)**が出版されたのは 1986 年からです。ハレーすい星が 76 年ぶりに大接近した年です。それから 30 年！　昨年の12月にやっと最終巻の 16 巻が出版されたのです。それまで映画化されたり、アニメ化されたりはしても、原作が終わる気配は少しも感じられませんでした。結局、小説の第1部の終りまでをアニメ化したにとどまりました。それからまたさらに1年、やっと出た最終巻。ここにきて、1巻目から取りざたされていた謎の真実が明かされて、それまで私の抱いていた印象とガラッと変わった人物がいます。30年前からの伏線と思うと、驚きです。ああ、生きているうちに最終巻を読めて、本当に良かった。【鈴木】